

月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊27年目
創刊1989年 Nr.310

2015年4月号



Jacques-Louis David, Napoleon am Großen St. Bernhard, 1801, Wien, Belvedere

EUROPA IN WIEN DER WIENER KONGRESS 1814/15 Unteres Belvedere und Orangerie 20. Februar bis 21. Juni 2015
ベルヴェデーレ下宮とオランジェリーで開催中の「ウィーンにおけるヨーロッパ ウィーン会議 1812/15」展より



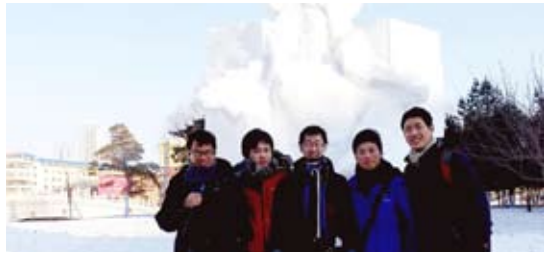
杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 43



中国のハルビン工程大学の招待により、ハルビンや北京で開催された国際会議において筆者が講演した縁で昨年一月に同大学で開催された雪像コンクールとシンポジウムに本学の学生が招待された。本年も招待されたので募集を行い、応募があった二チームで話し合った結果、核材料工学研究室の修士二年の竹野佑君と大中雅信君、四回生の西川将吾君と鈴木美博君の四名からなるチームをハルビンに派遣することとなった。コンクールには地元中国から五、タイ四、ロシア三など十一ヶ国から七十チームの参加があった。我が国からは京大と高知工業大学、北見工業大学の三チームが参加した。シンポジウムにはハルビン工程大学、京大、台湾精華大学が参加し、七テーマ(京大は「テーマ」の発表と討論が行われた。外国チームには現地大学のボランティアが二名付いて何かと世話をしてくれる。



雪像コンクールでは三×三×三メートルの雪ブロックを丸三日間かけて削って像を作る。マイナス二十度以下の寒さと大気汚染に悩まされる厳しい状況下、侍の雪像を何とか作り上げた。予定に組まれていたパーティーの二をキャンセルしてまた雪像作りに取り組んだほどで、完



成したときの達成感ほひとしおのこと。昨年の教訓に基づき雪像モデルを事前に製作して持ち込んだことが功を奏し、三等賞を獲得することが出来た。また、シンポジウムでの研究発表と討論にも積極的に参加し、宿泊した国際寮でも他大学生との交流機会を多く持つことができた。

た。ハルビンは皆初めてで、珍しい料理やボランティアの案内で市内観光も楽しむなど、新しい友人を得るとともに、貴重な体験ができた。学内報告会では四人とも多くの質問に笑顔で答えていた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、鉄道博物館について述べてみたい。ウィーンの鉄道博物館は郊外のシルバールド駅近くにあり、広大な敷地に転車台を囲むように百両以上の鉄道車両が展示されている。大型蒸気機関車やロータリー除雪車など貴重なものが多い。他にもミニ

鉄道の乗車体験や大型横切による庭園鉄道レイアウトなど子供も楽しめる。また、入口のチケット売り場は土産物店を兼ねていて、オリジナルグッズを購入することができ。かつてシェーンブルン宮殿近くのウィーン

産業博物館に展示されていた蒸気機関車の実物の多くは、一九九九年にこちらに移されたが、オーストリア鉄道創世記に活躍した蒸気機関車、宮廷車両の客車などは、今でも産業博物館のほうで見ることが出来る。こちらは鉄道博物館も豊富で楽しめる。

一方、京都駅近くにある梅小路蒸気機関車館には、資料展示館内に蒸気機関車に関するさまざまな資料が展示されている。続く半円形の扇形車庫の中には、明治から昭和にかけて旅客用、貨物用など目的に合わせて設計・製造された蒸気機関車が十九両保管されている。このうち動態保存車両は七両あり、うちSLやまぐち号とSL北びわこ号の二両は営業運転している。転車台の先では、蒸気機関車SLスチーム号が牽引する客車に乗り、蒸気機関車の旅の気分を満喫できる。入口のチケット売り場でオリジナルグッズを購入出来るのもウィーン郊外の鉄道博物館と同じである。蒸気機関車館は本年八月末にいったん営業を終了し、来年春に京都鉄道博物館として生まれ変わることになっている。



余談であるが、筆者はウィーン赴任中、鉄道博物館の存在は知らなかったものの、シャープベルク登山鉄道の蒸気機関車に乗ったことがある。京都では昨年蒸気機関車館を訪問して子供に混じってSLスチーム号を楽しんだ。両市の有名な鉄道博物館を紹介できた幸運介で来た。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■